

Powered by

CAR GRAPHIC



加藤哲也 株式会社カーグラフィック代表取締役社長  
渡辺慎太郎 カーグラフィック特約編集記者

## カーグラフィック的視点で見る スバル・レヴォーグへの期待

日本の自動車メディアをリードする自動車専門誌『CAR GRAPHIC』。国内外で年間数百台に及ぶクルマをテストする彼らの目に、レヴォーグは果たしてどのように映ったのだろうか。

**加藤哲也**（以下「加藤」と略す）「僕は常々、グローバルで高く評価されるには、ローカルでも魅力的なプロダクトであるべきだと思っている」

**渡辺慎太郎**（以下「渡辺」と略す）「自国民に見向きもされないようでは、世界の舞台で戦えるはずがないと。実際、世界戦略なんて考えず作ったはずなのに、自国で人気が出て結果的にグローバルでもヒット作になったクルマはたくさんありますね」

**加藤**「そう。そういう観点で言えば、レヴォーグは日本人に好意的に受け入れられるモデルじゃないかな」

**渡辺**「具体的に、レヴォーグのどの辺りからそう感じます？」

**加藤**「例えばCピラーからリヤエンドにかけての造形は秀逸だと思う。スタイリッシュなワゴンはいくつもあるけれど、レヴォーグの場合はこの部分が特に洗練されていて、日本人なら一度見たらきっと忘れない、レヴォーグであることを印象づけるクリーンなデザインとして成立している。日本の道路事情を考慮したサイズになっている点も日本人にとっては嬉しい」

**渡辺**「Bピラー辺りからルーフラインがリヤにかけてなだらかに下っていて、それがリヤのボリューム感のある造形にうまく溶け込んでいます。両サイドのウィンドウの絞り込みも適度だから、ラゲッジスペースへの浸食も最小限にとどめられているように見受けられますね」

**加藤**「こういうところは、やっぱりスバルは上手。それまで商用バンとして見られていたボディ形状を、スポーツワゴンという新しいまったく新しいカタチとして提案した。それが初代レガシィ。以来、ワゴンといえばスバルというイメージも定着。ワゴン作りに精通したスバルだからこそ出来た、機能性とデザイン性を両立させたスタイリングでしょう」

**渡辺**「個人的には、いい走りを予感させるデザインだと感じました。すべてが偶然ではないと思うけれど、走りのいいクルマというのは、往々にしてデザインも魅力的。今回は待望の水平対向ダウンサイジングユニットを搭載しているし、駆動形式はもちろん4WD。どちらもスバルが先駆者的な技術であり、相当刷新しているだろうから、いまから乗るのが楽しみです」

**加藤**「最近では写真やコンセプトモデルを先行発表するケースが増えている。でも、すぐにでもステアリングを握ってみたい衝動に駆られるクルマは決して多くない。今回の撮影では、スバルの方がずっとレヴォーグを動かしてくれて、それを傍らで眺めることしかできなかった。すごく辛かった（笑）」

**渡辺**「フロントページの水膜の上を走る撮影の時、水しぶきを上げながら何度も目の前を行ったり来たりするのを見ていても、四輪の接地性の高さや、トラクションがしっかりかかる様が確認できました」

**加藤**「スバルというメーカーは360やレガシィなど、エポックメイキングなプロダクトを生み出してきた歴史がある。レヴォーグはひょっとすると、レガシィ以来の革新的なモデルになるかもしれない。試乗する前にここまで言うのは勇気があるけれど、そうなって欲しいと期待したい」

**渡辺**「来年早々にはプロトタイプに試乗できる機会があるそうです。その報告を次号でお伝えするのが、いまから楽しみです」